

《論評》

秋山洋子の遺したもの ——日・中女性学の研究と交流

(中国研究所) 田畑 佐和子

秋山洋子さん（以下敬称略）は2016年の夏、74歳で没した。没後間もなく、彼女の最後の著書『フェミ私史ノート』（文末参照）が出版され、本誌編集部からこの本の書評を書くように言われた私は、すぐに承諾した。だがいざ書くとなると秋山についてこの本一冊では語り足らず、考えているうちに以下のような「書評集」になってしまった。大分長くなって心配だったが、掲載を承諾して下さった編集部に感謝している。

ウーマンリブ時代の記録『リブ私史ノート』

私が秋山と知りあったのは、ウーマンリブ運動の最初の火ダネがアメリカから飛んで来た1970年前後のこと。この運動について情報が広まるに従い、日本のあちこちで大小の女性グループがたくさん生まれたが、秋山と初めて出会ったのもある小集会でのことだ。そのグループは、平均年齢がわりに高く、子持ち、仕事持ちの女が多かったから、若い人たちのグループのように、身軽に行動もできず派手さもない。でも女性解放を求める心情には、それぞれ職場でも家庭でも身をもって経験しているだけに、若い女性に負けない深刻さがあった。定期的に集まって、「女性意識の向上」「女性の団結」のため話し合っていたが、運動の手始めとして取り組んだのが、勇敢なるアメリカ女たちの闘いの宣言書・リブのパフレットの翻訳だ。これを皆で協力、翻訳し、出版にこぎつけたことは一つの「成果」といえよう。『女から女たちへ』（文末参照）と題したこの本に、各地の読者から寄せられた多くの感想文は、日本の女性たちの胸に自由、平等を求める情熱をかきたてたことを私たちに確信させた。寄せられた感想文をこ

のままに放置せず、これらを書いた読者たちが互いに交流できるようにしよう、と考えた私たち（「ウルフの会」と名付けた）は、メンバー全員が自分の言葉でリブを語る文章を載せたミニコミを創刊し、その第1号の付録に読者の感想文を付けて、書いてくれた人たちみなに送付した。このミニコミは3号までで惜しくも終わったが、最終号に秋山が載せた「丁玲について」という文章は、「歴史的文書」とも呼びたいものとなった（後述）。これは秋山の著書『リブ私史ノート』（文末参照）に、彼女自身が詳しく記述もしている。秋山は上記の本で、この会のことだけでなく、日本の「リブ」という運動全体についてその発生から伝播、中心的人物の言動や運動の経過などを振り返り、その与えた衝撃や運動の特質を考察している。「ウーマンリブ」なる「新語」が誕生した由来の追究なども面白い。

秋山が「リブ」活動のうちで特に重要視していた分野を書き添えておこう。彼女は早くから、女の体についての科学的知見に強く関心を持っていて、「ウルフの会」の会報第2号——女の体、妊娠、出産などに関する特集号——は秋山が力を入れて編集を担当した号だったと記憶する。他人には聞きにくいこと、実用に役立つ知識なども載せたし、親しい友にも打ち明けられないような女としての辛い体験を書いたメンバーもいた。例えば当時まだ広くは知られていなかった不妊治療の辛さ、ひどい痛みなどの経験をつぶさに書いた文章が載ったが、これは会員の連帯意識を基礎としてこそ公けにされた、貴重な証言である。秋山がウルフの会以外の仕事として、『女のからだ』（合同出版、1974年）、『自然出産』（批評社、1980年）などの出版に記者の一人として熱心に関わったことも書き添えておく。

今回『リブ私史ノート』を再読して感じたのは、秋山の思考、行動の「国際交流的」とも呼ぶべき特徴であった。「国際交流」とは本来、外国から

取り入れる一方通行のことではなく、双方向の交流をいうのだろうが、日本では「外国から学ぶ」方に傾きがちな。リブという新しい女性解放運動にしても、最初はアメリカに始まり、「ウルフの会」がまずやったのは翻訳だから、確かに一方的「輸入」である。しかし秋山はその「輸入」活動もしながら一方で、日本にふらりと来ていた（ヒッピーというのか？）アメリカ人男性・ラリーに英会話を学びながら、「フェミニン・プレス」なる事業を考えつく。これはアメリカ・西欧の「リブ」たちに、日本の女性についての基礎的な知識を「発信」することで（彼女らの多くは日本女性についての知識は皆無だった）、互いに「女性解放」を語り合えるようにしたいとの考えから生まれた出版の企画だった。秋山はラリーの協力を得て、英語で日本の女性史（もちろんごく大筋の内容だろうが）を書きパンフレットにして、アメリカで販売にこぎつけたのだから凄い。彼女はさらに、先に触れた「丁玲について」の自分の文章も英訳、これもアメリカで売られてリブたち（その中に未来の中国研究者もいた）に読まれ、回り回って後に中国で出た『丁玲研究資料』のリストに、資料として掲載されたのだから面白い。秋山が、外から取り入れるだけでなく、こちらからも外国に「発信」することの大事さを意識し、実行した他の例は、後にも述べる。

『女たちのモスクワ』、そして中国女性学の始まりと李小江

秋山は1974年に、夫の仕事のため家族でソ連モスクワに転居、ほぼ同じころ「ウルフの会」も終わった。会の解散の原因は、会員に出産する者が続いたなど、みなが多忙になったためだが、実践的な秋山がいなくなったことも影響したと思う。一方、常に前向きで好奇心いっぱいの彼女は、現実に存在する「社会主義の国家」とはどんなものか、特にその女たちはどんな暮らしをしている

のかを、自分の目で確かめることに強い関心を抱いていたようだ。秋山の大学での専攻は中国文学だから、ロシア語は全く未知の言語だったはずだが、勉強家の彼女のこと、モスクワで暮らしながら学ぶつもりだったろう。モスクワ滞在は7年におよび（1974～1981年）、日本から連れて行った長女は4歳から11歳に、モスクワ生まれの長男は4歳になった。帰国してからソ連での日々を書いて出版した『女たちのモスクワ』（文末参照）は、モスクワのアパートで暮らす日常が記述されているが、中でも長男の出産と、二人の子どもの保育園経験など、育児に関する部分が丁寧に書かれる。考えてみれば言葉も通じず、親戚友人もいない異国で出産するというのはかなり心細いはず、それまでに学んだ「リブ式」出産の知識や心得は、それほど役立たなかったようだが、彼女は冷静に事に臨んだ。病院でのお産、産後の育児、保育園への入園など、淡々と書かれているが、その中で「保育園」のことは大事な話題だ。我々の世代の女にとって、「社会主義」と「保育園」とはしっかりむすびついた観念であり、「保育園」は未来社会のユートピアにまず不可欠のものだった。労働組合「婦人部」の最重要の問題は「保育園」と関係していた（ただしこれには「先進的」な労組でも男たちのほとんどは「おれには関係ない」という態度だった）。今もなお「保育園」とは働く女の「存在を左右する」致命的なモノに変わりはないが、未来の「社会主義」が「保育園」を連れてくるといふ夢想の方は、跡かたもなく消えた（推測だがリブ運動の昂揚期、保育園はかなり増設されたのではない。少なくとも豊島区では70年代に私たちの署名運動で区立保育園が新設された。なお秋山の保育園についての考察は後述する）。

『女たちのモスクワ』には、現実の社会主義国の女たちについて、具体的な観察や感想のほか、ソ連のメディアに登場した、女性に関する論議や統計も、まめに集められ紹介されている。では、「女

性たちは社会主義革命によって「解放され」たのか」という問いに対する彼女の答えは？ それはごく大まかに言えば、「ソ連の人たちが考えている「女性の解放」は、職業進出、あるいは法律上の平等、という段階にとどまって」おり、「解決されていない問題は山のように」で、女たちは「仕事と家庭を両腕にかかえ、離婚や妊娠中絶に悩んでいる」というものだ。しかしその一見して「古めかしい」社会の片隅にも、新しい「女性解放」思考がしずかに発酵していることを、「読み人知らず」の一篇の詩をとらえて紹介したのは、さすが秋山の敏感なアンテナだ。いずこも変わらぬ男性の身勝手を風刺する、秋山訳の「リブ詩」はなかなかいい。

7年のモスクワ生活が終わり、秋山が帰国したころ、日本では「リブ」を名乗る運動はすでに下火になり、女性解放を求める運動の続きは「フェミニズム」と呼ばれていた。この呼称はまだなんとなくお上品で、男女差別に怒る誰でもが「私はリブ！」と言えたあの感覚とは違った。国を離れていた秋山は、この違いをより強く感じたようだが、日本で成長し始めた「女性学」の世界にすぐに交わり、「フェミニスト」として活動するようになる。

同時にこの頃、彼女の専門の中国文学には文化大革命の終焉と同時に激動が生じていた。今まで隠されていた光景、語られなかった人々の苦しみ悩みが描かれ始めていたし、女性作家たちの活躍は目ざましく、やがて、世界的「女性解放」思潮の刺激もあずかって、中国独自の「女性学」創造を目指す、李小江のような人も出てきた。

秋山の興味がこの時期、中国に戻ったことは、彼女が多くの中関係の翻訳書を出したことで分かる。1990年には『フェミニズムは中国をどう見るか』（以下、すべて文末参照）、1991年には『中国女性——家、仕事、性』、1998年には『中国の女性学——平等幻想に挑む』、2000年には李小江

『女に向かって——中国女性学をひらく』などがある。その中で『フェミニズムは中国をどう見るか』だけは原文が英語、著者はアメリカ女性で、西側の中国研究者が、中国革命、特に農村における土地改革の内容をどう分析しているかを「学術的に」記述したもの。2番目の『中国女性』は、当時中国で発表された記録、論文、手記などから秋山が選んで訳した、中国女性たちの現状を描く文集。その多くは女性への残酷な差別や虐待を語って読者を驚愕、戦慄させるものだ。次の『中国の女性学』は、この頃までに急速に盛んになった中国の「女性学」を紹介しようという秋山の発案に、3人（江上幸子、前山加奈子、田畑佐和子）が加わり、討論をかさねながら編訳したもの、まさに社会主義の「幻想」を剥いで女性の厳しい現実立ち向かう、「中国女性学」の誕生を伝えようとしたものだった。

最後の『女に向かって』は、中国の女性学を創造した第一人者と言っても過言ではない、優れた学者兼組織者である李小江女史の、自伝でもあり、女性学創出の由来と経緯でもあり、その研究仲間たちの紹介でもある著書『走向女人』を訳した本である。この本には付録として、李女史が訪日して東京の「中国女性史研究会」（秋山も会員）の座談会に出席し、会のメンバーらと討論した内容も採録されていて、一方的でない「交流」をしようとの秋山や会員たちの意図が伝わる。座談会では、ほとんど日本を知らない李女史に実情を語ったり、「フェミニズム」についての彼女の考えに疑問を呈したりと、かなり率直なやりとりがあり、有益だったと李自身も語っている。

この本にはさらにもう一篇、李女史の文が載っている。これは、秋山と李との「交流」を示すとともに、当時の李の置かれた厳しい立場を露わに示す深刻な訴えでもある。話は1995年夏、中国が「国連世界女性会議」の開催国になった時のことだ。このとき秋山と私たちは中国でのNGOフォ

ーラムで、「中国における女性学」なるシンポジウムに聴衆として参加していた。これは「婦女連」が主催した会で、発表の準備などはよく整えられており、中国女性学が政府と協力して発展してきたことを強調する論調だったが、内容は秋山を憤激させた。「この十年の女性学の歩みを語るのに、「婦女連」の系統とは別に独立して道なき道を開拓してきた李小江たちのあげた成果に、できるだけ触れないですまそうという態度がみえみえだった」からだ。質問時間に秋山は立ち上がり「李小江の仕事になぜ触れなかったのか、李女史がなぜここに出席していないのか」ときびしく質問した。これに対する主催者の答えは「李小江にはこのフォーラムに参加するよう招請したのだが、病気で出席できなかった」というものであった（詳細は『中国研究月報』1995年10月号掲載の秋山「国家と女性と北京会議——李小江からの手紙」を読んでほしい）。会場での質問のことは、すぐに李女史（もちろんその場にいなかった）の耳に届き、李からは秋山に手紙が届いた。手紙は「私はあの質問を、あなたと日本の女性からの私たちへの声援と支持としてうけとりました」と始まって、李の文章——「わたしはなぜ95年世界女性大会NGOフォーラムへの参加を拒絶したか」という題名の、かなりの長文——が同封されていた。秋山がいうようにこの文章の内容は「女性のために開かれたはずの北京女性会議が、国家的事業にすり替えられてゆく過程で、最も大きな痛手を負ったのがほかでもない自主的に育ってきた女性研究の担い手たちだった」ことで、「女性会議開催」にからんで李自身の受けた具体的打撃も詳しく書かれている。秋山の勇敢な「質問」は、結果として李女史を励ます「交流」の信号となったのだ。

『私と中国とフェミニズム——二つの焦点』

『私と中国とフェミニズム』（文末参照）は中国とフェミニズムの二つの焦点を中心に折にふれ執

筆した文章を集めたもの、全体をおおまかに4章に分け、第1章は「社会主義」、第2章は映画、3章は中国文学、4章は中国女性学を論じた文をまとめている。

第1章にあるエッセイ「社会主義から何を受け継ぐか」を、私は発表された当時（1992年）に読んで、いいなと思ったのを覚えている。秋山は、かつての1960年代の「左翼的」学生の一人として、あっけなく消えてしまった「社会主義の祖国」に「複雑な感慨を抱き」つつ、「女性」の立場からこう言う、「今の時点で社会主義の女性解放が何であったかをキチンと確認しておかないと、社会主義の欺瞞を暴きたてる風潮に流されて、そこにあったプラスの面までもなくずしに葬り去られてしまうのではないかという危惧を私は持っている。社会主義に少しでも心を動かしたことのある者は、それぞれの場で、ちょっと立ち止まって考えてみる必要があるのではないだろうか」。そしてこの文は「フェミニズムの立場」からの、そうした試みのひとつであるとする。

彼女はまず、(かつての)社会主義国の女性のイメージ、男性と肩を並べて社会に進出する、職業を持つハツラツたる女性の姿を思い起こさせる。これは昔私たちの目に輝かしい社会主義の「女性解放」の達成のひとつと見えたのだが、実はこの女性進出の裏には、遅れた国の産業を飛躍させるという切迫した必要があったのであり、現実には女に課せられた家事の重荷はそのままで、その上に「仕事」が付け加えられたのだった。だが秋山は言う、「そういうマイナス面を考慮に入れても社会主義国における女性の社会進出は、女性の歴史に新たな1頁を画したものだということを、ここで再確認しておきたい」。そして東西ドイツの統一により東独の女性が被った損害（職場を失うなど）をふりかえりつつ付け加える、「旧社会主義国の女たちは、自由で豊かな生活＝資本主義という幻想の前に、失うかもしれないものの大きさ

に気付いていない。そうだとすれば、社会主義における女性の労働進出のプラスとマイナスを評価し、そこで不足していたものを補っていく仕事は、私たちの手に委ねられることになる」と。

さらに、女が仕事をするために欠かせない、保育の問題がある。これに対し社会主義はかつて「集団保育」という回答を出した。秋山によれば、革命直後のソ連の「集団保育」理論には、新しい社会の担い手を育てるという、理想主義的な意義づけもあったのだ。しかし1970年代の現実のソ連の保育園では、そんな理想主義はすでに形骸化していたように見えた。実際には「日本の幼稚園のような半日保育の施設はなく、(保育園は)働く母親の受け皿として、朝8時から夕方6時まで、朝食、昼食、昼寝つきで子供を預かるのが当然とされていた」(日本のような「幼稚園」は存在しないとちょっとビックリだが、現在はこれも変わっているかもしれない—田畑)。だがその「保育園」は、人手不足のため、保育の質の面では十分といえず、人々はそれを母親が働くための「必要悪」と思っているようだと言われると、やっぱりそうか、といささかガックリする。興味深いことに、集団保育の理論と実践とは、日本の方が進んでいるというのが秋山の経験から得た考察だ。そのわけは「日本では集団保育は主として社会主義的女性解放運動によって担われて来たからで、日本は社会主義国の集団保育の初心を受け継いで、社会主義国の現状を越えた」のだという。日本の保育運動はまず、集団保育が働く母親にとってだけでなく、子供たち自身に必要なのだと理論と実践の両面から再確認したこと、さらに進んで、子供の母親からの自立だけでなく、「母親の子供からの自立」が必要だという新しい視点を加えたことで、その存在意義をより確固たるものにした。「保母と母親の運動により、日本の保育施設は質、量ともかなり充実している。これは私たちが社会主義的女性解放運動から受け継いだ貴

重な財産であることは、そういう運動が弱かったアメリカの現状などと比べてみるとよくわかる。これをしっかり引き継いでその経験を生かしながら、フェミニズムの視点での保育論を創っていくことがこれからの課題である」と、この辺は秋山の文にしてはかなり力んだ感じだが、それは子持ちの働く女ならどうしたって保育園の話題には力が入るのだ！

性的タブーとピューリタニズムについて、現存する(または存在した)社会主義国がみな「禁欲的」である(あった)のはなぜか、これは女性解放の内実と関わる興味ある疑問だが、この点に関して社会主義国は今までなにも有効な答えを示していないらしく、いわば保守的な態度だ(未来社会の性愛の問題について、敢然と正面からとりくんだコロンタイ女史についての秋山の論は後述する)。

最後に秋山の、社会主義に寄せる言葉。「我々の世代……にとって社会主義とは何だったかといえば、それは「理論」である前に、「理想」だったのではないだろうか。……フェミニズムもまた、平等な社会、弱者を尊重する社会という意味で社会主義と同じ理想を共有している……しかしフェミニズムというのはいつか来るユートピアではなくて、現実のがまんできかないところを一つずつチェックし、変更し、歯止めをかけてゆく終わりのない過程そのものではないだろうか。……それが私なりに、社会主義の崩壊から学んだことである」。

文革後の中国文学について

第2章、3章は主に中国の映画と文学について語る。秋山はかなり映画が好きで、まめに映画を観、感想も書いている。だが専門はやはり文学だから、彼女が力をそそいでいる現代中国文学についての文章を主として紹介すべきだろう。

3章の「ジェンダーの視点から読みなおす」と

いう文章は、新しいフェミニズム文学批評の立場から書かれた文学史の紹介と、二人の女性作家の文学がどのように「読みなおされて」いるのかを辿るもの。前半では「女性主義の見方による女性の文学史」の大胆な試みとして1989年に出た、孟悦・戴錦華による『歴史の地表に浮かび出る』が取り上げられる。上述の李小江の主導による『婦女研究叢書』の一冊として出されたこの本は、秋山がいうように「強い衝撃力と高度な理論性」を具え、「ジェンダーの視点から歴史の構造をみきわめようという強烈な意識に貫かれて」いる。これとの比較で秋山が取り上げるのは、上の本の6年後に出た、盛英主編の『二十世紀中国女性文学史』で、後者は、非常に多くの「新時期」の女作家を網羅しているながら、『ある冬の童話』で衝撃的なデビューをした遇羅錦、「中国女性系列」を書いた戴晴などの名前を（政治的配慮から？）載せていないことが指摘されている。「これは中国での女性学が「いまだに厳しい状況にあることを象徴している」と秋山は言う。この政治気象変化の厳しさは『歴史の地表に浮かび出る』というフェミニズム文学史の存在をさらに貴重なものにしてている。

文章の後半では、丁玲と蕭紅という二人の女性作家の生涯と作品が、特に女性という観点から論じられている。丁玲の評価は、「革命文学派」と「フェミニズム批評派」との間で綱引きされている状況だと秋山はいうが、たしかに1980年以後しだいに、「革命作家丁玲」から、ジェンダーの視点に立った丁玲の研究が大きな流れになってくるのを、私たちは「丁玲学会」に参加して目の当たりにした。かつて党の立場からコテンパンに批判された作品が、フェミニズム派から高く評価されるという「従来の文学史の完全な逆転」が見られるのが丁玲だ。秋山は「かつて私は丁玲を「意識せざるフェミニスト」と呼んだが、『国際婦人デーに思う』に込められた「家父長制社会主義」への批判の鋭さは

丁玲自身には意識されていないのだ」と言い、「ここにフェミニズム批評の「片思い」がある」とほろ苦い指摘もしている。

ところで丁玲を「フェミニズム批評」の観点から論じたのは、秋山が「世界で最初の人」だと私が信じている次第を言い添えておきたい。「ウルフの会」の会報第3号に秋山が書いた丁玲の「三八節有感」（秋山は「国際婦人デーに思う」と訳している）についての文を最初に読んで、その斬新さに驚いたのは編集当番の私だった。そのずっと前に丁玲で修士論文を書いた私は、むしろ「三八節」の内容も記憶していたが、これが女の立場からの「革命政権を握る男たちへの抗議の書」と認識してはいなかった。「革命の聖地延安でも、女はけっこう大変なんだなあ」くらいの感想で読み過ごしていたのだ（「女の大変さ」を何一つ骨身に沁みて経験していない、ノータンキなあの頃）。しかも50年代すでに「丁玲批判」で踏みつぶされた丁玲は、どこやら遠くに追われて当時は生死も不明、私も中国文学を離れてから十数年たっていたのである。秋山がなぜこの時期に、丁玲の延安時代の悪名高い文章を思い出して、古新聞から探し出したのか、それを聞いておかなかったのが悔やまれる。ともあれ秋山の文章に刺激された私は、以後丁玲を「女性」の観点から読み直すことになる。そのころから日本では「女性学」の成長とともに「フェミニズム文学批評」が隆盛となり、多くの優れた女性論者の著作が発表されたのだが、中国文学界ではこの動きは遅かった。丁玲の作品について女性の視覚からの論文が多く書かれるようになったのは80年代後期であり、丁玲学会がその回の中心テーマを「丁玲と中国女性文学」としたのは、1996年の第7回学会になってからのことだ。

もう一人秋山が「読みなおされて」いる女性作家として詳しく論じているのは蕭紅である。ここには「蕭紅再読」と、「丁玲の『風雨の中で蕭紅

を偲ぶ』をめぐって」と題する二つの文が採録されている。「蕭紅再読」では、蕭紅の代表作と言われる「生死場」と「呼蘭河伝」について、その二作が、発表以来どのように評価されてきたか、その変遷を辿りつつ、秋山自身の蕭紅作品への思い入れが語られる。まず蕭紅の小説に対する男性の高名な文学者たち——魯迅、胡風、茅盾など——の見方・意見を紹介し、それらの批評に対して心の奥では承服できずに自分の文学の道をひたすら追求した蕭紅の心情を、深く掘り下げてゆく。そして蕭紅の文学が目標としたものを、常に「中心をめざす」男性とは違う、女性の小説・女性の文体の追究であったと考え、その価値を高く評価する。濃やかに蕭紅の「女性としての創造」を論ずる秋山の論文要旨を、ここで詳述はできないが、これは長いこと「周辺に置かれてきた」薄幸の女性作家に贈られた、愛ある力作である。

もう1篇、「丁玲の『風雨の中で蕭紅を偲ぶ』をめぐって」は、抗日戦争中の西安で蕭紅と語り合ったことを追想する丁玲の文章を、秋山が読み解く随想だ。当時すでに高名だった二人の女性作家が、この時写した写真はかなり流布していて、楚々とした洋装の蕭紅と軍服の丁玲は、ややちぐはぐな印象を与えるものの、当時この二人ともが重い悩みを抱えていたことは、その笑顔からは想像できない。そして丁玲の上記の文章からは、彼女と蕭紅が何を語り合ったのか、その内容は全く読みとれない。秋山は丁玲の、重苦しい心情に閉ざされた文章のまさに「行間を読みこんで」、二人の間に流れていた女性としての共感、その無言の言葉を語らせた。秋山は最後に「『国際婦人デーに思う』と『風雨の中で蕭紅を偲ぶ』とは呼応しあう作品として論じられるべき」だと書くが、この言葉の意味は深い。

3章では丁玲の代表的作品として、短編「霞村にいた時」が論じられる（「丁玲の告発が意味するもの——「霞村にいた時」再考」）。詳しい筋は

省くが、これは日中戦争中の山西の農村を舞台とし、日本軍に拉致され性奴隷にされた貞貞と言う名の少女を主人公とした物語である。この小説は事実をもとに書かれたものだが、これまで、歪曲された批判も含め、多様な読み方がなされてきた。秋山はきっぱりと、この作品は日本軍に捕われ病気をうつされて村に戻ってきた貞貞に対して村人が示した軽蔑、差別の態度を、丁玲が告発したものであるとする。そして性的犯罪の特殊性について「女性に対する性犯罪だけは、（普通の犯罪とは逆に）被害者の側の恥とされる」こと、「恥を知らない（女）」という、霞村の村人と同じ次元の罵言が57年丁玲批判時に繰り返されたことを、想起させる。戦争時の性犯罪の被害者が、どれほど酷い傷を負い、回復不能というほどの状態に突き落とされてきたか。それを示すため秋山は、「日本軍「慰安婦」問題調査報告」の内容を紹介する。引用されているのは、1940年に河南省で日本軍に拉致され「慰安婦」にされた82人の中国女性の、「戦後」の生活の調査報告（江浩『昭示——中国慰安婦』青海人民出版社、1998年）である。惨憺たる苦難の日々（家族ともども政治闘争の標的になるなど）に耐えたあげく、（調査時まで）生き延びた者はただ一人だった。その生存者は、日本軍の手から解放された後、同胞の中国人から批判、差別され続けた後半生について、「もしも出てきてからこうなると知っていたら、慰安所で死んだほうがましだった」、「わたしたちはただの女、日本人に蹂躪されたと言うだけで、犬のように這って生きなければならないのですか」といい、村人から、新しく架けた橋を渡らせない、新しい家に入れない、外で遊ぶ子供たちに触れさせない、などの差別をされてきたと訴える。「村の外見は新しくなっても、差別だけはまったく変わらず生き続けている」のだ。

秋山はいう、この記録を引用したのは、日本軍の加害を過小評価し、中国の人々を非難するため

ではない、「性的被害を受けた女性に対する蔑視は、儒教社会であった日本や韓国に留まらず、全世界でまだ解決されていない重大な問題なのである。しかし1970年代から始まった第二波女性解放運動において、この問題は……女性の視点から検証されてきた。……このような時代の動きに目をやる時、抗日戦中の1941年という時点で、村人の意識構造を的確に暴きだすとともに、貞貞を犠牲者あるいは抗戦の英雄という類型に留めることなく、さらに自立にむけての一步を踏み出させた「霞村にいた時」の先見性を、あらためて評価することができる」と。

ここまで秋山が蕭紅と丁玲を論じた文章を紹介してきたが、第3章にはまだ数篇の、女性に関わる中国文学の叙述があり、題名とテーマだけでも紹介したい。「錯綜する民族とジェンダー」は「淪陷区」で活躍した女性作家、主に旧満州で書いていた呉瑛をとりあげて論じ、「八十年代中国文学にみる性と愛」では、遇羅錦、張賢亮、王安憶という新時期文学の作家3人の、性と愛を書いた話題の小説を論じる。中でも遇羅錦の「ある冬の童話」の作品論に最も力が入っている。「下放青年が描く文革後」は朱曉平、池莉の作品を評する。最後の文「信子の声はなぜ消されたのか」は、上述の題材とは異なり、サブタイトルに「中島長文「道聴途説」への疑義」とあるように、魯迅の兄弟不和の原因をめぐる中島の議論を、「フェミニズム批評」の立場から探った文である。謎に包まれたその「原因」についての従来の論議の中にも、男の「見方」（そして「味方」）というバイヤスがかかっていないかという問いかけだ。

第4章は、「中国女性学をめぐる」と題して4篇の文章が載る。最初の文、「参加した人としなかった人」とは、1995年の北京での国連世界女性会議の報告で、李小江からの手紙については前述した。次の2本の論文は中国女性学のかなり学術的な検討で、例えば、一方で西欧フェミニズム、

一方で中国「伝統の」マルクシズムと女性学との関係などが検討されている。

最後に載った「中国女性が語る戦争」は李小江の取り組んだ『二〇世紀（中国）女性口述史叢書』四巻のうちの「戦争体験」巻について語られているが、「女性学」には興味のない人でも、「辛亥革命以来引き続く戦争」に影響され続けた中国女性たちの語りは、胸に響くものがあるに違いない。白いエプロンを着、日の丸の旗をふって出征を見送った戦時日本の妻たちの姿とは全く違った次元の、すさまじい戦争参加者・被害当事者としての女性の姿がここにある。しかしその反面、戦争（参加）を「肯定的」ととらえている女性の語が多いことは、李小江自身にとっても意外だったという。李はそれをこう解釈する、「底辺であろうと中・上層であろうと、無学であろうとインテリであろうと、女性たちはみな「戦争参加」を通して家から出て社会に向かい、「解放」に向かうことができるという、世界の中でも女性の社会参加の独得な風景を実現することになった」と。最後に秋山は戦争と女性との、国ごとに異なる複雑な関係を考察しながら、「日本における女性の戦争経験と、中国における女性の戦争経験とを、どうつないでいいのか」と疑問を呈する。それは秋山の次の仕事に繋がるものだった。

2005年4月、秋山は李小江の勤める大連大学のジェンダー研究センターに客員教授として赴任、1年間在外研究に従事する。秋山はここでも「国際交流」の試みを怠らず、二つの仕事をした。一つは2005年9月、大連大学での日中女性研究者のジェンダー研究座談会で、これには李小江も参加し司会を務めた。もう一つは日本における「戦争の研究」、特に女性と戦争についての研究成果を選抜、中国語への翻訳を監修して、1冊の本に仕上げ、置き土産としたことだ。これは秋山と加納実紀代が編集に当たり、ジェンダーの視点から戦争を反省的に考察する論文を選んだもので、日本

では従来女性は「被害者」としてのみ描かれてきたが、実は体制の共犯者でもあったのでは、との問いかけも含まれている。本のタイトルは『日本視覚——戦争与性別』（社会科学文献出版社、2007年性別研究叢書）で、8人の女性研究者と1人の男性研究者の成果を集めた、日本の戦争研究を中国と共有し、「交流」をするための資料として貴重な1冊である。

『フェミ私史ノート』

ここでやっと、最初に依頼された秋山の最後の本にまで辿りついた。もちろんこれまで書いてきたのは彼女の仕事のごく一部、私の眼と理解の届く狭い範囲のことにすぎないが、この1冊で、ともかく終わらねばならない。本書も前述の『私と中国とフェミニズム』と同様に、様々なテーマ、スタイルの文がたくさん収められているが、秋山自身が苦心して4章に分類した目次を立てているのだから、これに従って見て行こう。

第1章は「国境往還」という章。このタイトルは日本の国境だけではなく、いろいろな国境を越えるという意味にとろう。冒頭にまず蕭紅の「沙粒」という長い「詩」が現れる。越境した人の哀愁が迫るような詩。センスのいい編集だ。それに続くのは前述した秋山自身の大連滞在の話、続いて日本と大連の歴史に関する話題。そして郁達夫の暗殺者を突き止めた研究者の本、続いて「若き日の高杉一郎」の書評へと飛ぶ。前者の本は、私も以前読んで大感激したものだし、後者は私の知らなかった大事なことをたくさん教えてくれた本だ。

第2章は「歴史をみなおす視線」の章。最初に置かれたのは「田村泰次郎が描いた＜貞貞＞」と題された、小説『肉体の悪魔』論である。＜貞貞＞というのは田村の小説に出て来る人の名前ではなく、上述した丁玲の小説「霞村にいた時」の主人公、日本軍に拉致され「慰安婦」的境遇を強いら

れた女性の名前である。秋山は田村の小説に、丁玲のあの小説を重ねて考えているのだ。

田村の『肉体の悪魔』は、1946年に発表されて彼の代表作の一つとなった作品で、山西省の戦場を背景に、日本軍の一兵士と捕虜になった中国女性との「熱烈な」恋愛を描いている。だが侵略軍の兵士と、捕われて自由を奪われた八路軍の女兵士、そういう男女の間に真実「熱烈」な愛が存在し得るのか。小説の主人公の兵士は身も心もその捕虜の女に惚れているが、女の方の気持ちは（心底から侵略者日本を怨んでいることははっきりしている）どうなのか。実際女性研究者からは、この恋物語は日本兵の勝手な思い込み、男の独りよがりが強すぎるという、厳しい批判的な読みも提起されている。

一方で、田村泰次郎の研究者により、彼の軍隊での部署や仕事について、詳細な現地調査を行った本が出ており、それによるとこの小説の登場人物や大きな出来ごととはすべて、事実裏付けされているという（尾西康充『田村泰次郎の戦争文学——中国山西省での従軍体験から』笠間書院、2008年）。主人公は田村自身であり、その恋人のモデルは中国の抗日劇団の一つ「太行山劇団」のベテラン女優だった。秋山は尾西の調査を読んでこの小説の背景と、丁玲の「霞村にいた時」の状況との類似をいっそう感じた。つまり丁玲の作品の、日本の軍人に囲われた（はっきりとは語られていないが）貞貞の状況と、田村の小説の「捕虜の女」の境遇とは、かなり共通しているのではないか。恋の情熱をもっぱら男の側の「一人称で」書いた田村、現地調査によって事実迫った尾西、両方を踏まえて秋山は、酷い受難者としての捕虜の女性の心中の「語られない真実」に迫っている。彼女の多くの書評と同じくこの文章も、秋山の「読み込む」力を感じさせる。

これに続く文は「洲之内徹の書いた日中戦争」である。この内容は日中戦争の体験を描いた田村

の小説と繋がり、また田村と洲之内が親しい間柄で、長期にわたって親交があったこともあり、続けて読むと分かりやすい。秋山が洲之内について書くことになったきっかけも、田村の作品を研究したことだったという。この二人の作家は、同時期に山西省で中国と戦っていたばかりでなく、帰国後の洲之内は田村と同じく、作家を目指して作品を発表していたのだから、ある時期までは同じ道を歩いていたのだった。しかし洲之内は3度芥川賞の候補になりながら受賞をはたせず、やがて文学の道から離れ、美術評論の書き手となった。ここでは秋山は、洲之内が中国での戦争時期の経験をもとに書いた文学に焦点を当て、「戦争と文学」について思索している。彼女が主に論じているのは洲之内の作品のうちの2種の文学——1、洲之内が軍の情報集めという任務のために雇用していた、中国人・朝鮮人の捕虜たちとの、きわめて複雑かつ緊密な人間関係を描く作品群、2、中国での日本軍の悪行を容赦なく書いた小説「砂」という作品——についてである。洲之内について無知だった私には、洲之内の書く戦争の「裏側」は驚きであり、さらに「砂」についての秋山の解説には大きな衝撃を受けた、というくらいの紹介しかできない。

次に置かれた文もまた、上の二人の作家が戦った地のごく近くで起こった、戦時の性暴力を考えるもの。即ち日本軍兵士による性暴力の被害者である女性たちを、長年にわたって実地調査し支援してきたグループの著書『黄土の村の性暴力』（創土社、2004年）の書評である。秋山はこの仕事が、歴史学という学問にとっていかに貴重な貢献をしたか、しつつあるかを論証し、強調している。石田米子を中心とするこのグループの成果は、沈黙の闇に消されようとしていた被害者女性たちの「真実」の記憶を、長い苦労の末に掘り起こし再現したというだけではない。踏みこじられた被害者の女性たちの「尊厳をとりもどす」という石田た

ちの高い目標は、(裁判で勝つことはできなかったが)被害女性たち自身、またその周囲の人々を徐々に、確実に変えてきたこと、変えつつあることは確かと思われる(この奇跡のような石田たちの活動の現場を秋山とともに見学したことを思い出す)。

2章の最後は中国女性作家・張潔の小説『無字』についての文。張潔といえば「新时期文学」の中でも特に目立ったフェミニズム文学の書き手で、小説「方舟」(1982年)はその代表といえよう。『無字』は1989年から10年の年月をかけて完成した作品で、秋山でさえ「ちょうど在外研究で大連にいた時期だから読めた」と言っているほどの長編大作だ。ここでは秋山はこの作品のごくおおまかな内容を語ったあと、それに対する中国での批評を紹介しながらこの作品の特徴、「受けとられかた」を語る。例えば高名な王蒙はこの作品を「比類なく率直で、比類なく誠実で、比類なく大胆」な「極限の創作」だと褒めたあと、これに対する違和感、嫌悪感を率直に表明しているという。王蒙は、作者の男性に対する強い被害者意識、特に性関係におけるそれが一方的であり、しかも男性に対する糾弾には、中国で繰り返された、政治運動における糾弾と共通するものがあると見る。ごく短く言えば王蒙の評は、男性からの不公平感、不快感を底流とすると見えようか。一方、フェミニズム批評家として活躍中の荒林は『無字』を、中国女性の物語であると同時に、中国男性の物語でもあるとする。秋山の引用によれば、「『無字』に登場する男たちはみな、かつてなかったほど無責任で、疲弊し、場当たり的で無能である。おそらくこれこそが真の中国式の女性の経験の表現であり、同時に中国式の男性の経験の表現なのかもしれない」と。そして秋山は、張潔が小説の主役級男性に「延安抢救運動」を経験させていることを一例にあげて、『無字』の歴史記述がきわだっていることの一例としている。以上秋山の論文からごく

一部分だけつまんで引いておいた。

3 章には、2 篇の文あるのみ、二つともロシア革命時期に世界的に名を馳せた女性、コロンタイを論じるもの。『『赤い恋』の衝撃』と題した文の方は、コロンタイの名高い小説『赤い恋』が1927年に日本語訳で出され、続いて短編「三代の恋」と「姉妹」の日訳も発行されてからの、日本での反響、賛否両論の議論を振り返る。当時の書物やメディアの記事を渉猟して、多くの女性・男性の自由闊達な議論を紹介した部分は、今読んでも意外なほど面白く、古さを感じさせない。特に「三代の恋」は、ロシア革命後の若い世代が実践(?)する、従来のモラルの束縛を廃した自由な性の行動を書いて、大きな論議を呼んだものだが、これは「革命の本家」においてレーニンに「一杯の水」論として断固否定されてしまった。だがコロンタイ恋愛論についての秋山の議論はここで終わらず、コロンタイが新しいプロレタリア社会の両性関係に不可欠なものと考えている次の3点を紹介する(「有翼のキューピットに道を与えよ」にある)。秋山の補足的解説は略して、その筋だけをあげると、1, 相対関係の平等 2, 相手の心と精神とを不可分なものとして支配するという要求をもたない、相手の権利の相互的承認 3, 親しい、愛する者の心の働きに傾聴し、それを理解しうる僚友的感受性、の3点だ。これらは当然のこのようだが、今も実現してはいない。

もう1篇は「コロンタイの恋愛論の中国への紹介と反響」という題名通り、中国でのコロンタイの受容を詳しく研究している。興味深いのは、日本で彼女の論が翻訳出版されるとすぐに、中国でもそれが紹介され話題となったことで、この時期の日本と中国の文化の「近さ」が目立つことだ。特にコロンタイの「三代の恋」の「一杯の水」主義が、当時の延安の知識青年の間にまでも話題となっていたというのは面白い。むろん日中のこの「近さ」は戦争拡大とともに消えるのだが。

第4章は「リブの時代をいまにつなぐ」と題して、9 篇の文章が並ぶ。冒頭に置かれた「対幻想のかげで」は、中で最も長く、力が入っていて、衝撃力もある。ただしこれはリブの運動を書いたのではなく、語られるのは最高級の教育と知性へと恵まれた三人の女性、高橋たか子、矢川澄子、冥王まさ子(言うまでもなくそれぞれ、高橋和巳、澁澤龍彦、柄谷行人の配偶者)である。文の冒頭は、この三人が書き残した、自分が配偶者のために原稿を清書するシーン。もちろん彼女らが夫のためにしたことは清書だけではない。自分より優れた才能を持つと信じた夫のため、仕事の助手や秘書を務めるのはもちろん、家庭の雑事すべてを自分が担った。実に献身的、従順、そして素晴らしく有能な女性たちだった。しかしその抑圧された「自我」は、爆発せずには済まなかった。彼女らが夫との別離ののち書き遺したものは、怨念の累積だ。彼女らが書いたすべての事例を挙げるゆとりはないので、秋山がぎゅっと凝縮した一節を引いておこう。

「文壇の寵児となってゆく夫と清書にいそしむ妻、加虐の夫と被虐の妻、性の快楽を楽しむ男とその後始末に血を流す女、日本的母子密着の連鎖。これまで引用してきた(三人の)文章から読みとれるのは、フェミニズム批評が解明してきた日本の家父長制の典型的な見取り図である」。はたしていま、これがすべて日本の「遠い過去」の夫婦、家庭の姿となったのだろうか？

これに続く4章の文は、短いエッセイと書評。中で比較的長いのは『暮らしの手帖』を論じるもの。続く書評3篇は飯島愛子の自伝と、西村光子の『女たちの共同体——70年代ウーマンリブを再読する』(社会評論社、2006年)、金井淑子の『異なっている社会を——女性学/ジェンダー研究の視座』(明石書店、2008年)をとりあげる。いずれも秋山自身の運動との関わりも振り返りつつ、著者と対話しつつ書かれた文。そして本の最

後に置かれた、「北村三津子さんの死とリブがしたこと」の一文は、秋山によると「リブを体現している人」だった北村さんと言う人を実に生き生きと描き出し、生前の彼女を知らない人にまでその死を悼ませる。それだけでは終わらず秋山は後半で自分がずっとこれまで関わってきたリブ・フェミニズムを振り返っている。「いまの日本のジェンダー状況をみるとき、なぜいまだにこうなのか、なにかが間違っていたのではないかという問いも出てくる」けれども、「日本社会のジェンダー不平等の基本構造は、やすやすと崩壊するほどやわではない。……だからそれほど絶望することもないのかもしれない」と、いつものクールな口調に戻る。

秋山の生前書いた本の「書評集」はこれで終わる。これらが広く読まれるよう願っている。昔、ひどい批判で一時消えた丁玲を、「リブ運動」の中で再発見して以来、秋山は中国を理解しそれと「交流」することと、「フェミニズム」の探究という二つの目標をともに目ざしてきた。私の紹介は掲載誌の性格上、やや前者の面に重点が傾いていることを、了承していただきたい。

以下、上の文中に取り上げた秋山の主な著書のデータを示しておく。

『女たちのモスクワ』（勁草書房、1983年）

『リブ私史ノート——女たちの時代から』（インパクト出版会、1993年）

『私と中国とフェミニズム』（インパクト出版会、2004年）

『フェミ私史ノート——歴史をみなおす視線』（インパクト出版会、2016年）

編訳『中国女性——家・仕事・性』（東方書店、1991年）

訳書 李小江『女に向かって——中国女性学をひらく』（インパクト出版会、2000年）

共編訳『女から女たちへ——アメリカ女性解放運動レポート』（ウルフの会訳、合同出版、1971年）

共編訳『中国の女性学——平等幻想に挑む』勁草書房、1998年）